

## モール夫人への手紙にみるナイチンゲールの女性観

広島文化学園大学大学院看護学研究科  
佐々木秀美, 林 君江, 小河 朋子

**論文要旨** 一般的に手紙は自己開示と思えるほど自己の真実を他者に伝えることができるものである。本論はナイチンゲールの書いた手紙を彼女自身の語りとして捕らえ、その内容を質的研究法で内容分析を試みたものである。モール夫人著『マダム・レカミエ』に対するナイチンゲールの反駁に関する限り、両者間の見解の相違の第一は経験から語る、つまり、真実から語ることと伝統的な慣習で語るという問題が含まれていた。第二の論点は女性の共感性の問題であり、第三の論点は女性の共感の寄せ方にあると考えられた。こうした論点から手紙の内容は、マダム・レカミエ論というより、マダム・レカミエを素材にしたナイチンゲールの抱く女性観であると考えられた。

ナイチンゲールは、“女性の特性は、他人に対して共感する傾向が強い”とのモール夫人の考えは“全く慣習的な考えであり、自分の経験から述べるとすれば、真の共感とは、誰かに感化されて生きかたまで変えることである。自身の経験からすればそれができたのは女性たちではなく男性たちである。ゆえに、真の共感には男性にある”と主張した。

**キーワード：**ナイチンゲール, 女性観, マダム・レカミエ, 真の共感性

## ■ はじめに

戦後制定された日本国憲法における男女平等の原則によって、女性の人権も保障された。現代の女性は自らの生き方を自分自身で決定し生活を選択できるようになり、様々な分野で活躍する存在となっている。しかし、その人の暮らす地域や生まれ育った時代が異なれば、女性や男性に対する捉え方は異なることであろう。そうした男女の問題についてはフランス革命以降、議論されてきた問題であり、ナイチンゲールの時代には“女性の権利 (Women's Right)”運動が展開されていた。彼女の高い知性は、社会における問題を適確に掴み、女性の問題は、個人の行動にかかっており、忍耐強く問題を解決するように努力するべきであると考え、女性たちを無知から解放するために教育を施し、女性たち自身で問題に対処できるよう

にしたかった。ナイチンゲールは自身の高い価値規範で、女性の生き方に関する高邁な理想を抱いた。その高邁な感情は女性達を引き上げる為の理念に繋り、彼女の有している情熱はそれを確かなものとする活動の源流になった。そして、女性達はナイチンゲールの業績を通して真に社会に解放されたのである。

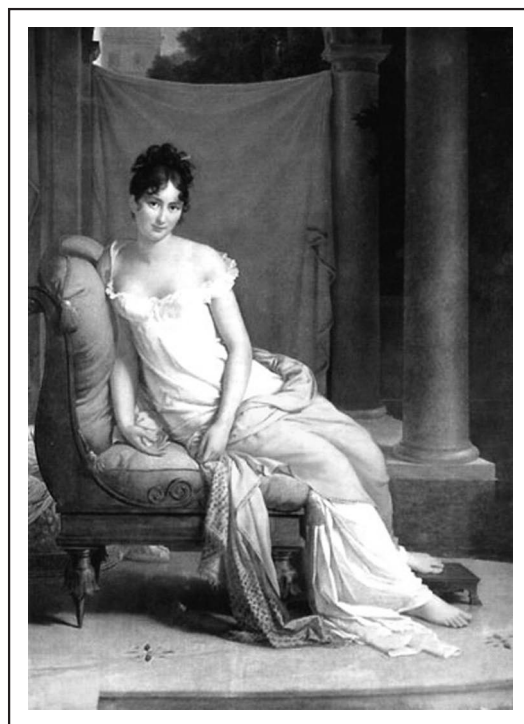
ナイチンゲールが生きたヴィクトリア王朝時代は、産業革命により経済の発展が進んでいた。その時代は封建的で、一通りの教育を受けたとしても結婚するほかに、生まれ育ったその家庭を離れる道はなく、女性が「独立の地位」を持つことなど考えられなかった。その中でナイチンゲールは、スクタリの英国陸軍病院で軍人や軍医からの偏見を受けながらも、病院の衛生状態の改善や管理者として看護婦達への指示や傷病兵の看護を行うという経験をしている。それは目をみはる活躍であ

り、兵士の待遇改善もなすという業績でもあった。1856年にクリミア戦争が終結すると直ちに隠遁生活に入り、ビクトリア女王を巻き込んでの陸軍の改革、1860年には女性問題を解決するべく看護教育の開始などと日々多忙を極めていた。

1861年8月、彼女と同じ共感を持ち仕事支えてきたシドニー・ハーバート<sup>1)</sup>が病に伏し死亡する。更にその年の11月、ナイチンゲールの秘書を努めていたアーサー・ヒュー・クラフ<sup>2)</sup>の死が、更なる凶報として彼女を襲った。しかし、悲しみに暮れるまもなく彼女は一層仕事に打ち込んだ。この時、彼女は、真の共感を寄せる者を熱望し周囲を見渡すが、彼女の目に映った女性の中には、自分を助けてくれる者は誰もいなかった。そのため彼女は、自分と同性である女性たちに対し深く悲しむと共に憤りを感じた。ナイチンゲールは、その活動推進の中で女性に対して新たな感情が沸き上がった。その時のナイチンゲールは、とても深い孤独感の中に身を置いていた時期であったと考えられる。ナイチンゲールのターゲットはその辛辣さと相舞って女性の特性に関する問題にも波及した。そうした時期の1861年、ナイチンゲールは、モール夫人(メアリー・クラーク)<sup>3)</sup>の著作『マダム・レカミエ』に対し、論評に値する手紙を出している。

モール夫人は、スコットランドの古いジャコバイトの家系で、財産も権勢も美貌も持たずパリの政界及び文壇の大立者となった女性である。名前はメアリーと言ひ、彼女を世に送り出して成功させたのはマダム・レカミエ<sup>4)</sup>である。1830年頃、メアリーは母と共にマダム・レカミエの住んでいた森の修道院へ転居し、マダム・レカミエの無二の親友となり、彼女の催す夜会に常に参加していた。メアリーは、ユリウス・モール<sup>5)</sup>と1847年結婚しモール夫人となる。モール夫人は、女性というものをあまり好まなかったが、ナイチンゲール一家を気に入り、特にナイチンゲールを好きになった。

マダム・レカミエは『フランス女性の歴史』<sup>6)</sup>にも堂々と登場するフランス社交界の有名な貴婦人である。旧姓をベルナルと言ひ、1777年、フランスのリヨンに生まれた。1793年のフランス大革命の最中、一介の役人の娘から16歳で富裕な銀行家と結婚しマダム・レカミエとなった。彼女は18歳の時サロンを開き、徐々にパリの3美神と言われる様になる。そして生まれつきの美貌と社



交術でフランス社交界の女王として君臨した。モール夫人にサロン経営の手ほどきをしたのも、実はマダム・レカミエであると言われる。マダム・レカミエはサロンに出入りするシャトーブリアン<sup>7)</sup>やプロセイン王子アウグスト<sup>8)</sup>などを魅了し、かのナポレオン・ボナパルト<sup>9)</sup>ですら彼女を落とすことができなかった言われている。しかし、マダム・レカミエは40歳の時、シャトーブリアンに恋をした。そして54歳の時にはサロンを閉じてパリの修道院に隠遁し、気鬱病にかかったシャトーブリアンを救い出すことを目的にしていた。二人の愛はシャトーブリアンが79歳で死亡するまで30年間続いた。

マダム・レカミエを崇拜していたモール夫人は、夫人の死後『マダム・レカミエ』を著し、ナイチンゲールにその著作を送ったのである。その本を読んだナイチンゲールはあなたの御本『マダム・レカミエ』を半分ほど拝読いたしました。とても面白くて夢中になっております。でも、いくつかの点で私はあなたと見解を異にしています。というよりは、納得できない点が多々あるのですと書き、見解の相違について述べている。この頃、ナイチンゲールは『ナイチンゲールとミルトの論争—ヒューの論文を手がかりに—』<sup>10)</sup>でも示したように、女性たちに対し幾分感情的になる傾向があった。モール夫人に送った手紙を分析すれば、男性たちの憧れの対象であったマダム・レ

カミエをナイチンゲールがどのように捉えていたのかがわかり、そこからナイチンゲールの女性観が浮き彫りにされると考えられる。そこで本研究では、ナイチンゲールの手紙をモール夫人の著作『マダム・レカミエ』評価と捉え、その評価からナイチンゲールの女性観について検討したので報告する。

## ■ 研究方法

### 1. 研究方法；歴史研究（質的研究）

#### 2. 研究デザイン

##### 1) 分析対象データ

1861年にナイチンゲールがモール夫人に宛てた手紙の全文は『ナイチンゲール[その生涯と思想 I・II・III]<sup>11)</sup>『Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters』<sup>12)</sup>に挿入されている（資料-1参照）。

##### 2) 分析手順

- (1) 手紙の全内容から重要文脈を抽出し、番号を付す
- (2) 抽出された重要文脈をサブカテゴリー化する
- (3) サブカテゴリー化された文脈をカテゴリー化する
- (4) 抽出されたカテゴリーを構造化し、ナイチンゲールの基本概念とする。

## ■ ナイチンゲールの手紙の内容分析結果

### 1. 手紙の全内容から重要文脈の抽出

ナイチンゲールの手紙の全文に重要文脈であると研究者らが考えた箇所に番号を付し、抽出した結果、82の重要文脈が抽出された（表-1）。

### 2. 抽出された重要文脈をサブカテゴリー化

抽出された重要文脈はをサブカテゴリー化した結果、36項目に分類された（表-2）。

### 3. サブカテゴリー化された文脈のカテゴリー化

抽出された30のサブカテゴリーをカテゴリー化した結果、『マダム・レカミエ』に、夢中になっているが、いくつかの点であなたと見解を異にしている”、“女性は男性に比べて、他人に対して共感をいなく傾向が強いという貴方の結論あるいは、マダム・レカミエの生活は子宝に恵まれな

かったからむなしかったは慣習的であるから、自身の経験から真実を語ってほしい”、“自己の経験から述べるとすれば、女性には共感が欠けている”、“イギリスの伯爵夫人やプロシアの農婦との身近な関わりなど、ヨーロッパ全体に比されるほど膨大で、階級を問わない直接的な女性についての私の経験からの確信である”、“ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、経験したことのないさまざまな信条の女性を監督し、私ほど、女性の中に「情熱」を掻き立てた者もない”、“女性は総じて無知、無関心であり、知識欲も向上心もない”、“女性には共感が欠けているゆえに、私をモデルにして生き方を変えた女性はいない”、“ウンディーネ〔伝説上の水の精〕のようなすばらしい例もあるし、私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長、夫への純粋な共感があつた女性たちも存在はするが”、“女権拡張論者たちが相手の心情を理解しない無神経な発言、自分中心的な態度は共感が欠けているからではないか”、“自分の人生を完全に変えてしまった男性達が真の共感である”、“ナイチンゲールの親しかった人への真実(共感)のあかし”、“私は人に共感できるからある意味男性的なのかもしれない”の13のカテゴリーを導き出すことができた（表-3）。

### 4. 抽出されたカテゴリーの構造化

抽出された13カテゴリーをさらに構造化することによって両者間の見解の相違が明らかになった。ひとつはモール夫人の見解は慣習からであり、ナイチンゲールの見解は経験からであるということ、さらに、その経験はナイチンゲール自身が経験した膨大な経験からである。さらに見解の相違は女性の共感性の問題であり、モール夫人の見解は女性に共感性があるとのことであり、ナイチンゲールのそれは女性には共感性がなく、真の共感性は男性にあるとの見解であった（図-1）。

## ■ 手紙の分析に見るナイチンゲールの女性観

構造図（図-1）にも明らかなようにナイチンゲールがモール夫人と見解の相違があると考えたのはまず、女性の共感性（sympathy）の問題であると考えられた。

まず、第一の論点は伝統的な慣習と経験という大きな重要な要素が認められたことである。

まず、ナイチンゲールはモール夫人の文章に「マ

ダム・レカミエの生活は輝かしくはあったが、むなしかった。それはモール夫人が子宝に恵まれなかったから<sup>13)</sup> という文章についてである。子宝に恵まれなかったから空しいというモール夫人の考え方は、女性が結婚して子どもを産み、育てることが幸せであるという伝統的な考え方に立脚していると考えたのと同時に、子供を持たないナイチンゲールにとってそれは、自身に対する非難の言葉であると受け取ったのであろうか。ナイチンゲールはモール夫人に対して「どうぞ、慣習的な考え方に捉われないようにお願いしますよ。」<sup>14)</sup>と述べている。ナイチンゲールは他人から、あなたは妻や母の思いは理解できないでしょう<sup>15)</sup>と良く言われるが、私は理解できないで幸いだともおもっていると答えているのですと述べ、奥様方や母親のあきれられるほどの自己中心的な考えにうんざりしている<sup>16)</sup>とも述べた。更に彼女は、人はそれを母性愛であるとか夫婦愛であるとか言っている気になっているのですよ<sup>17)</sup>とも述べている。結婚をしておらず、子供を有しないナイチンゲールにとって母性愛であるとか夫婦愛であるとかについて問われることは屈辱的であったろう。しかも、それがナイチンゲールに夫や子供がいないことを知っていてわざとらしい質問であったとしたらことさらである。しかし、有しないことと理解できないということは別であろう。経験しないことについて同情することや共感することができないとしたら、私達は死に行く人の気持ちは一度、死ななければ分からないということになる。手術をする人の不安は手術をしなければ分からないということになる。実際、ナイチンゲールは、子供はいなかったが、夫が成すよりも彼女に協力する男性に恵まれた。さらに実の子供はいなくてもナイチンゲールは見習い生や兵士達の母親であり、限りない慈しみを有していた。それは『見習い生への書簡』によるナイチンゲール自身の言葉「愛する子どもたちへ。あなた方が私のことを、大お母さまと呼んでくださったことを、うれしく思います。」<sup>18)</sup>に良く現れている。ナイチンゲールの深い愛情、それが陸軍の改革にもつながったのであろう。ゆえに、ナイチンゲールは“女性は男性に比べて、他人に対して共感をいだく傾向が強いとか、あるいは、マダム・レカミエの生活は子宝に恵まれなかったからむなしかったというモール夫人の考え方は、伝統的な慣習に基づいた発言であると捉え、自身の経験から真実を語ってほ

しい”と述べたのであろう。自身の著作『看護覚え書(Note on Nursing)』<sup>19)</sup>にも述べているように伝統的な慣習は女性たちを自身が考えている理想的な看護婦に教育するに困難を来たしていたし、自身の成長過程における家族との対立、婦人病院での監督官としての仕事、クリミアでの従軍における苦難は、“イギリスの伯爵夫人やプロシアの農婦との身近な関わりなど、ヨーロッパ全体に比されるほど膨大で、階級を問わない直接的な女性についての私の経験からの確信である”、“ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、経験したことのないさまざまな信条の女性を監督し、私ほど、女性の間「情熱」を掻き立てた者もない”と言えるほどの経験であったろう。『プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学』<sup>20)</sup>にも示されたとおり、ナイチンゲールはイギリス経験論(empiricism)を引き継いでいると考えられる。

第二の見解の相違は女性の共感性の問題である。それはモール夫人が「女性は男性に比べて、他人に対して共感を抱く傾向が強い」<sup>21)</sup>と書いた文章に対してであった。ナイチンゲールは自分の経験からこの本を書くとしたら「女性の場合、他人に対して共感をいだくことがめったにない」<sup>22)</sup>と書くであろうと述べ、モール夫人の記述は伝統的な慣習からであり、自分は経験からの確信である<sup>23)</sup>と述べた。そうした“自己の経験から述べるとすれば、女性には共感が欠けている”のであった。共感するとは生身の人間の感情に踏み込むことであり、相手の心情を理解しなければでき得ない。ナイチンゲールの見解によれば、当時の“女性たちは総じて無知、無関心であり、知識欲も向上心もない”のであり、女性は閣僚や教会の主教について知ろうとせず無知無関心であり学習しないこと、愛されたり共感したりして欲しいと望むが、自分からは愛そうとしないし、共感しようもしない自分中心的な態度であること、奉仕の心を持っているが他人への共感を持っていないこと、彼女の生き方・考え方から自分の生き方を変えた女性は見ることがないなどである。この例から女性は自分の考えを優先し身勝手であり、自分の考えを持たず学習しない存在として捉えていることが考えられる。

ナイチンゲールの時代、イギリスでは公教育として義務付けられた学校教育はなかった。寄宿舎付きのパブリックスクールやグラマースクールも存在したが、それらは男性に準備されたものであ

る。女子に対してはナイチンゲールのような上流社会の子女達のみが、ある一定期間家庭で教育された後、無秩序な寄宿舎付きの私立学校で教育された。その教育は礼儀作法や音楽、ダンス等社交界に必要な教育および家政的な教育が主流であり、その内容も一貫していなかった。上流階級の子女さえこの様な状況であったから、労働者階級の子供達には教育らしい教育が存在せず無学なものが多かった。ナイチンゲールはかつて父親への手紙に「何故、女性が学問、芸術、科学の分野で重要な貢献ができないのか」<sup>24)</sup>と書いたが、恵まれた環境にあった彼女自身の学習環境から、女子教育の放置、そうした社会的現実も含めてのナイチンゲールの発言であったろう。

ナイチンゲールは“女権拡張論者たちが相手の心情を理解しない無神経な発言、自分中心的な態度は共感が欠けているからではないか”と考えた。ナイチンゲールが看護婦になるための教育を開始したが、その教育に女権拡張論者は協力しなかったのである。女性たちはナイチンゲールの中で大変に苛立つ対象になっていた。ナイチンゲールは「何かの口実として、記憶にないと言いつてる人々に私は苛立ちを感じます。耳を傾けもしないことが、どうして記憶できるのでしょうか」<sup>25)</sup>と述べ、続けて「だから私は女権拡張論者たちが女性に対する職業の分野への解放を叫んでいるのを聞くと全くいやになります」<sup>26)</sup>とも述べている。特に、女性の権利運動に参画している女性たちに対してはうんざりしている心情になっていたと考えられる。

併せてクリミアでの組織上の乱れと混乱は、女性の持つ特性からであると考えたのかもしれない。さらにそれはキリスト教の創世記における女性の邪悪さを認めさせるものとなり、源罪主義を肯定する立場に至ったのかもしれないが、『カサンドラ』までのナイチンゲールは女性に同情的であり、それは無教育のせいであると考えた。クリミアでの女性達の争い、陸軍の改革における批判、女性の権利運動や参政権問題での論争、看護教育やその他の一連の改革に対する協力不在といった現実を突き付けられたとき、彼女の中に女性不信が芽生え、女性達に対して懐疑主義となったと考えられる。ゆえに、ナイチンゲールは“女性には共感が欠けているゆえに、私をモデルにして生き方を変えた女性はいない”との結論を導き出したのであろう。

しかし、女性の中には、“ウンディーネ〔伝説上の水の精〕のようなすばらしい例もあるし、私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長、夫への純粋な共感があつた女性たちも存在はする”と考えた。ウンディーネはラ・モット・フーケが1811年に発表したメルヘン小説『ウンディーネ(Undine)』<sup>27)</sup>に出てくる主人公である。彼女は水の精であり、人間との結婚は許されていない。しかし、ウンディーネは遍歴の騎士に恋をし、結婚を希望する。水界の王は騎士の貞節を疑い、結婚を反対するが、ウンディーネはそれを振り切って結婚をした。騎士がウンディーネを裏切ったときは彼の命を奪ってもよいと言う契約を交わして。しかし、水界の王が指摘したようにそれが現実となったときに、ウンディーネが示した純粋無垢な心、この心が恐らく真実の愛としてナイチンゲールには映ったのであろうか。この素晴らしい例や、彼女に関心を持ち影響を受けた二人の総婦長は共感できるとナイチンゲールは考えている。ナイチンゲールのいう真の意味での共感とは、ナイチンゲールの立場に立ち、ナイチンゲールが思いを馳せている事柄に対して同じように考えるだけでなく、彼女と同じ志を持ち与えられた仕事を成し遂げ、そして実際に彼女と行動を共にすることであると考へたのであろう。また、与えられた仕事に責任を持ち成し遂げるためには、その仕事に関する知識や情熱が必要であると思われる。これらのことから女性は、相手の心情を理解しない無神経な発言をしたり、夫への共感から生きていたりするため、女性の共感の寄せ方について納得できないと述べたと考えられる。

他方、「男性にはそうした例がしばしば見られるのです。」<sup>28)</sup>と述べ、幾人かの実例を挙げた。勿論、ナイチンゲールの陸軍改革構想に共感し、実質的に力を尽くしたシドニー、『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察－友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりを手がかりに－ Some consideration concerning Nightingale's view of religion - Is to the clue relations with friend Arthur Hugh Clough -』<sup>29)</sup>でも報告したように、ナイチンゲールと同じような宗教観を有し、ナイチンゲールに共感を寄せて自身の詩人としての能力を振り捨てて傍らで雑務を引き受けたクラフ、彼女に共感を寄せ自分の人生と処世の方針を変える行動を取った医務局長のトマス・アレクサンダー<sup>30)</sup>、ナイチンゲールの哲学的思想に共鳴し、彼女の多

くの助言を与えたギリシャ語教授ベンジャミン・ジョウエット<sup>31)</sup>などがあげられる。彼らは常にナイチンゲールの側にいて協力を惜しまなかった。ナイチンゲールはある政治家はもう中年を過ぎようとする中で、私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針をすっかり変えてしまいました<sup>32)</sup>と述べながら、“自分の人生を完全に変えてしまった男性達が真の共感である”と考えた。つまり、ナイチンゲールの言う真の共感とは、彼女に共感を寄せ自分の今までの生き方の方向性を変えた男性達などであった。ナイチンゲールの“親しかった人への真実（共感）のあかし”として、感謝のための三つの寡婦帽を頭に載せているのであり、それがナイチンゲールにとっての真実の証しであると述べたのであろう。ところが、ナイチンゲールは自分自身には共感性があると考えていた。そうすると女性には共感性があることになってしまう。そこで彼女は“私は人に共感できるからある意味男性的なのかもしれない”と自身に共感性があるのは、自分が男性的だからであると結論づけた。

最後の論点は女性の共感性の寄せ方に対してである。ナイチンゲールはマダム・レカミエがマダム・サルヴァージュやシャトーブリアンなど正反対の方々になぜ助言を与え、共感を寄せることができたのか<sup>33)</sup>ということに対して疑問を投げかける。マダム・レカミエは正反対な人々に助言を与え、共感を寄せることがどうしてできたのか理解できないことであると述べている。『フランス女性の歴史』や『Madame Recamier and Her Friends』<sup>34)</sup>にはシャトーブリアンとマダム・レカミエについて多くのページを割いており、両者が非常に親密な関係であると記述されている。しかし、マダム・サルヴァージュがどういう人物なのかあるいはどの様な立場で対立していたのか現時点では明らかでない。シャトーブリアンはフランスの有名な小説家であり、政治家である。当時、彼はマダム・レカミエの極に近い人物であった。シャトーブリアンの政治的立場からしたら、あるいはマダム・レカミエ自身の立場から見ると、マダム・サルヴァージュという人物は恐らくはシャトーブリアンの政治的立場と反対の立場の人物だったのであろう。ナイチンゲールにしてみればそれは、ウィリアム・エバント・グラッドストーン<sup>35)</sup>とシドニーという全く方針を異にする政治家に同時に助言を与え、共感を寄せることと同じであった。両者は当時、全く対立していた。ナイチ

ンゲール達の一連の改革に協力していたシドニーに対してグラッドストーンは、大蔵大臣という立場から反対の立場を取っていたのである。そうした反対の立場にある人に同様な共感性を有することはナイチンゲールには到底考えられなかった。それゆえ、ナイチンゲールはマダム・レカミエがマダム・サルヴァージュとシャトーブリアンの両者に共感できることが疑問に思えたのであろう。つまり、結論から言えばナイチンゲールは、女性には共感性があると考えたモール夫人に反駁を加えたのである。

当時の時代背景を考慮しつつ検討すると、そこから見えてきたものとして、この手紙を書いたナイチンゲールは当時、女性に対する思いを心の中に鬱積させていたため、この書籍に触れたことにより、その思いのたけをすべて出し切ることが出来たのではないかと考えられる。また、手紙でのナイチンゲールの反駁に関する限り、マダム・レカミエ論というより、マダム・レカミエを素材にした一般的な女性に対する見解のように考えられる。作者、モール夫人は恐らく、一般論として“女性の特徴は、他人に対して共感する傾向が強い”と書き、マダム・レカミエがそうした女性であったことを書いたのであろう。しかしナイチンゲールは、この点に関して、モールの夫人の考えは“全く慣習的な考えであり、自分の経験では女性には他人に対して共感を覚えることは少ない”と書いている。そのことから、モール夫人を伝統的な慣習で物事を考える一般的な女性の中に位置づけ、そうした考えを否定し、自分の経験をもとに真実を語って欲しいというナイチンゲールの願いがそこにあると考えられた。そしてナイチンゲールは女性たちに経験から論じよと、そして経験から学べと強く主張するのである。

## ■ おわりに

一般的に手紙は自己開示と思えるほど自己の真実を他者に伝えることができるものである。本論はナイチンゲールの書いた手紙を彼女自身の語りとして捉え、その内容を質的研究法で内容分析を試みたものである。その手紙はナイチンゲールの生涯におけるあるいは、彼女自身の歴史のほんの1ページには過ぎないが、それは途方もなく困難な時代を切り開いた人物の経験が書かせたものである。よって、その結果を、当時の時代背景を

考慮して、検討してみると手紙でのナイチンゲールの反駁に関する限り、マダム・レカミエ論というより、マダム・レカミエを素材にしたナイチンゲールの女性観であるとの結論に至った。

手紙の内容はマダム・レカミエという人物を通して、当時の女性達の様相が生き生きと描き出されており、同時に、ナイチンゲールとモール夫人の見解の相違が明瞭である。作者、モール夫人は“女性の特性は、他人に対して共感する傾向が強い”と書き、マダム・レカミエがそうした女性であったと書いた。ナイチンゲールは、この点に関してモール夫人の考えは“全く慣習的な考えであり、自分の経験では女性は他人に対して共感を覚えることは少ない”と書いている。その上で、ナイチンゲールはそうした見解を慣習的であると受け止め、自身の経験からすれば、真の共感性は男性にあるとの結論をみちびきだしている。いかにナイチンゲールが女性に対する伝統的で慣習的な考え方を否定したかったかということは、彼女が行った陸軍衛生に関する改革や女性に対する看護教育の開始などからも明らかである。ナイチンゲールを取り巻く周囲の環境から考えた場合、一連の改革に対する女性たちの協力者不在は、彼女が女性に対して懐疑的になったのも当然であったかもしれない。しかしながら、ナイチンゲールが率直に自己の考えを述べられる女性がモール夫人であったことも考えた場合、結局、ナイチンゲールは永年の親友であり、相互に理解し合える人生観を有していたであろうモール夫人が、実はナイチンゲールに対し、常に共感性を示していたことを理解するには至らなかったようである。この時点で両者は、マダム・レカミエについて論じながら、女性観についての見解に相当の隔たりがあることに気づいた瞬間であったろう。女性のためにナイチンゲールが開発した看護専門職という職業、それは実際、医療現場で病んで苦しむ人々に対し、適切なケアを実践する。その為には共感性を持つことが求められる。従って、看護専門職者が具有すべき重要な要素でもある。本論ではナイチンゲールの手紙分析から、彼女の有した女性観を通して女性の共感性の問題に関心を寄せることができたが、特に彼女の主張である経験から学ぶということの本質については、イギリス経験論(empiricism)の立場からさらに探究を進めるべきであると考えている。

## 注

- 1) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861)；クリミア戦争当時の戦争大臣。ナイチンゲールの生涯のパートナーであり、良き理解者、協力者である。名門ペンブルック伯爵家に生まれ、政治家となった人物。1852-1855, 1859-1860に陸軍大臣を務め、ナイチンゲールの改革を推進した。しかし、激務のため病気となり、公務からの引退を希望するが、ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている。辞職後に病死。
- 2) アーサー・ヒュー・クラフ (Arther Hugh Clough 1819-1861)；英国の詩人。ラグビー校で学んだ後、オックスフォード大学で学んだ。ナイチンゲールの友人であり、彼女の従妹ブランチと結婚、ナイチンゲールの仕事を手伝った。
- 3) メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883)；子ども時代から成人するまで各地を転々とするが、マダム・レカミエの支援により、パリに“クラークキー”という最も優秀で知的なサロンを持った。特にヘンリー・ボナハム・カーターや文学者たちと親密な交友関係を持った。
- 4) マダム・レカミエ (ジャンヌ-フランソワーズ・ジュリー (・アデレード), Jeanne Fraçoise Julie (Adelaide) 1777-1840)；銀行家の夫を持ち、サロンを主催した。彼女のサロンは元王党派や反ナポレオン派にとって粹な社交場となった。
- 5) ユリウス・モール (Julius Mohl 1800-1876)；ドイツ南西部地方のヴェルテンブルク出身の貴族。忠実な新教の信者であり、東洋学者でもあった。メアリーに恋をしてフランスに帰化した。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』p. 40より
- 6) アラン・ドゥコー著、山方達雄訳；フランス女性の歴史4 一目覚める女たち, p. 86, 大修館書店, 1981年。
- 7) フランソワ・オーギュスト・ルネ・シャトブリアン (François Auguste・René Chateaubriand 1768-1848)；フランスの政治家・小説家。王政復古以降様々な政治、社交の職に就くが、首相になる夢はかなわなかった。後年、マダム・レカミエの最も親しい友人になっている。

- 8) プロセイン王子アウグスト；フリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世 (Friedrich Wilhelm III 1770-1840年) のことであると考えられる。彼は父の後を継いでプロイセン王に即位した。プロイセン王 (在位：1797-1840年)。家庭においてはよい父だったが、消極的な平和主義に固執し、ナポレオン・ボナパルトの侵略に対して中立の態度をとり、敗れるという危機の時代にあっても改革を主導する能力と意欲を欠いていた。しかしこの時代、プロイセンには文武ともに有能な人材が輩出し、プロイセンの領土は引き続き拡大し、近代化も徐々に進んでいった。
- 9) ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte 1769-1821年)；革命期フランスの軍人・政治家でフランス第一帝政の皇帝。革命後のフランスを纏め上げた。
- 10) 佐々木秀美著；ナイチンゲールとミルとの論争－ヒューの論文を手がかりに－, 総合看護, Vol. 37 No. 3, pp. 53, 64 2002年。
- 11) Sir Edward T. Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳：ナイチンゲール [その生涯と思想 I・II・III], 時空出版, 1993年.)
- 12) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited ; Ever Yours, Florence, Nightingale Selected Letters, p. 440, VIRACO PRESS, 1989.
- 13) 前掲書12), p. 231.
- 14) 前掲書12), p. 231.
- 15) 前掲書12), p. 231.
- 16) 前掲書12), p. 231.
- 17) 前掲書12), p. 231.
- 18) Florence Nightingale (1888); To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund", (湯植ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻, 看護婦と見習い生への書簡, 現代社, p. 451, 現代社, 1985年.)
- 19) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
- 20) 佐々木秀美著；プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学, 総合看護 Vol. 44, No. 2, pp. 5-15, 2009年。
- 21) 前掲書12), p. 229.
- 22) 前掲書12), p. 230.
- 23) 前掲書12), p. 230.
- 24) Harriet Martineau's Writing; British History and Military Reform vol. 6, England and her Soldiers, p. 30, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
- 25) 前掲書12), p. 230.
- 26) 前掲書12), p. 231.
- 27) ラ・モット・フーケ (Friedrich de la Motte Fouqué 1777, 1843年)；ドイツの初期ロマン主義作家・詩人。祖先はフランス北西のノルマンディー地方の古い貴族の家柄であり、1685年のナント勅令廃止により、プロイセンに亡命した。フーケの祖父はプロイセンの将軍となり、フリードリヒ 2 世の親友で、フーケが誕生した時には、フリードリヒ 2 世が名付け親になったほどであった。フーケは軍人になり、遠征の途中で見初めた女性と結婚した。しかし、数年後には年上の貴族の未亡人で流行作家だったカロリーネ・フォン・ロホーと結婚するため、この妻とは離婚した。フーケは軍人を辞めた後、作家に転身。1811年に『ウンディーネ』を発表した。これは彼の代表作となり、後にドイツで長い間読み継がれることとなる。『ウンディーネ』には別れた最初の妻への想いが込められているため、実に美しく悲しい物語になったと言われている。
- 28) 前掲書12), p. 230.
- 29) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美共著；『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察－友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりを手がかりに－Some consideration concerning Nightingale's view of religion, Is to the clue relations with friend Arthur Hugh Clough－』その1－, 総合看護 Vol. 40, No. 3, pp. 41-48, ーその2－, 総合看護 Vol. 40, No. 4, pp. 73-80, 2005年。
- 30) トマス・アレクサンダー (Dr. Thomas Alexander 1860年)；クリミア戦争の最前線で勤務した有能な外科医。戦後はカナダへ左遷されたが、ナイチンゲールの側近として、ナイチンゲールによって陸軍医務局長となる。1860年急死した。
- 31) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；イギリスのギリシャ哲学者。ナイチンゲールの思想に共鳴し、彼女の仕事を手伝い、多くの助言を与えた。ナイチンゲールの生涯の友人である。



32) 前掲書12), p. 230.

33) 前掲書12), p. 233.

34) Isaphene M. Luyster; Madame Recamier and Her Friends, Boston Knight and Millet, 1867.

35) ウィリアム・エバント・グラッドストーン (William Evant Gladstone 1809-1898); イギリスの政治家. 1868-1874, 1880-1885, 1886,

1892-1894の間, イギリスの首相を努める. パーマストン内閣 (1859) 下では大蔵大臣であり, 陸軍省の改革を目指すシドニー・ハーバートと予算をめぐって対立していた. シドニー・ハーバートが亡くなった後, ナイチンゲールに回想記を書いて欲しいなど要請, シドニー・ハーバートを記念する事業を提案したりしている.

図1 両者間に見る見解の相違

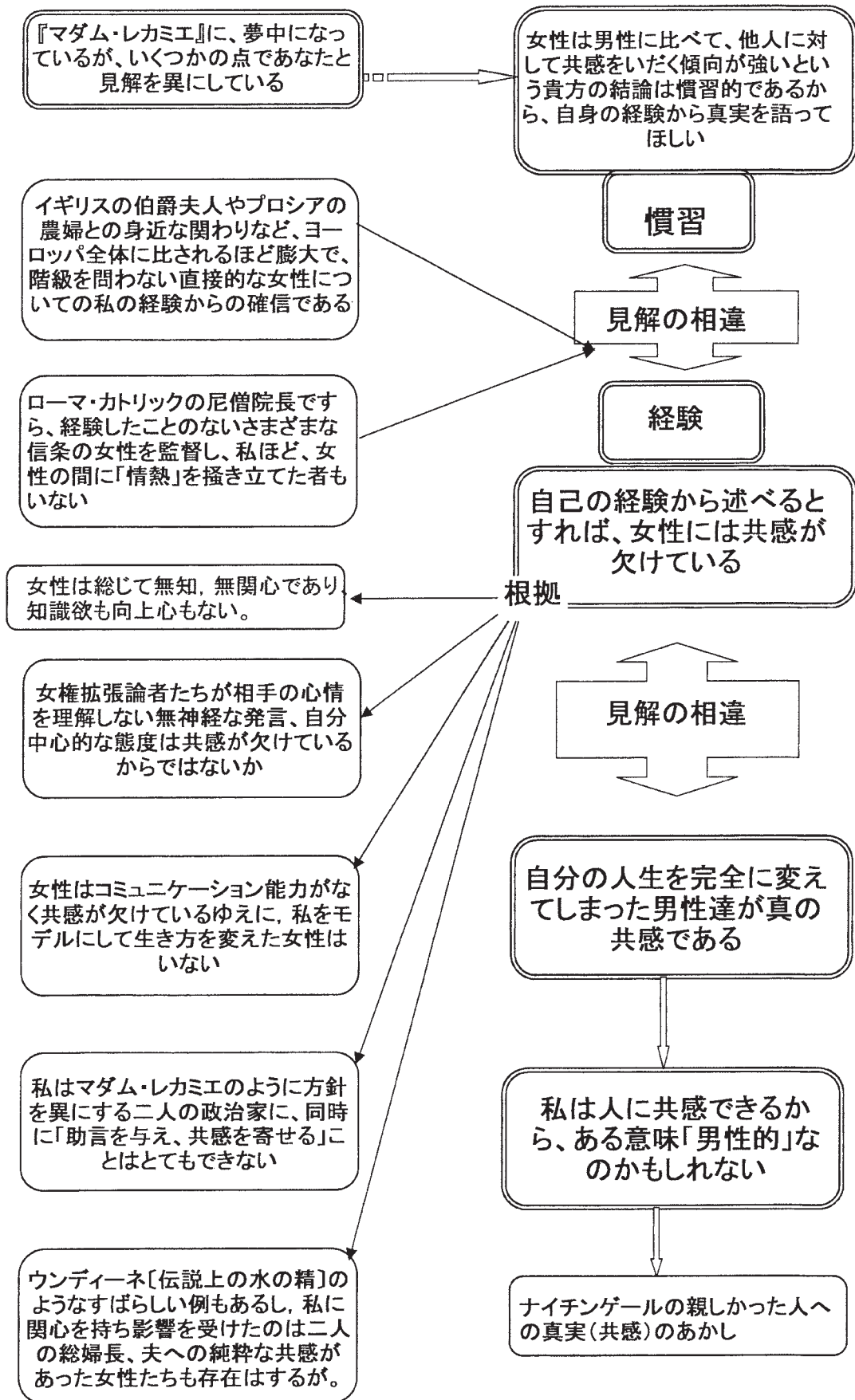


表-1 モール夫人に宛てた手紙の内容分析

本 文	重要文脈
<p>1) あなたの御本『マダム・レカミエ』を半分ほど拝読いたしましたが、とても面白くて夢中になっております。でも、2) いくつかの点で私はあなたと見解を異にしています。3) というよりは、納得できない点が多々あるのです。それは、4) あなたの御本の登場人物についてではなく、あなたの結論、つまり「女性は男性に比べて、他人に対して共感をいづく傾向が強い」ということについてです。5) もしも、私が自分の経験にもとづいて本を書くとしたら、最初の書き出しは「女性の場合、他人に対して共感をいづくことがめったにない」とするでしょう。6) あなたのお考えは慣習的に受けいれられているものですが、7) 私の考えは、自分の経験からの確信です。8) 私はいままで女性が私のせいで、あるいは私の意見のせいで、ほんの少しでも自分の生き方を変えたという実例を見たことがありません。9) 一方、男性にはそうした例がしばしば見られるのです。10) ある政治家は、もう中年を過ぎようとする年で（すでに4分の1世紀もの間、もっぱら政治に打ちこんできたのですが）、11) 私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針をすっかり変えてしまいました。</p>	<p>1) あなたの御本『マダム・レカミエ』を半分ほど拝読いたしましたが、とても面白くて夢中になっております。2) いくつかの点で私はあなたと見解を異にしています。3) というよりは、納得できない点が多々あるのです。4) あなたの御本の登場人物についてではなく、あなたの結論、つまり「女性は男性に比べて、他人に対して共感をいづく傾向が強い」ということについてです。5) もしも、私が自分の経験にもとづいて本を書くとしたら、最初の書き出しは「女性の場合、他人に対して共感をいづくことがめったにない」とするでしょう。6) あなたのお考えは慣習的に受けいれられているものです。7) 私の考えは、自分の経験からの確信です。8) 私はいままで女性が私のせいで、あるいは私の意見のせいで、ほんの少しでも自分の生き方を変えたという実例を見たことがありません。9) 一方、男性にはそうした例がしばしば見られるのです。10) ある政治家は、もう中年を過ぎようとする年で（すでに4分の1世紀もの間、もっぱら政治に打ちこんできたのですが）、11) 私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針をすっかり変えてしまいました。</p>
<p>つまり12) 彼は、最も退屈でテクニカルな、またきわめてむずかしい管理行政という科学を人間の具体的な生活との関連において学びました。それも13) 私と違って心おどる経験からではなく、ロンドンのこの私のソファのかたわらで、無味乾燥な規定を書き綴ることによって。14) これこそが真の共感というものではないでしょうか。15) もう一人、私が医務局長にしたアレグザンダーという人もほとんど同じような行動を取りました。16) すでに故人となっている、天性の詩人クラブも、私のために看護行政にたずさわってくれたのです。17) この3人はみな、私に対する共感のゆえに、自分の人生を完全に変えてしまったのでした。18) そのほかにも、ファー、マクニール、タロック、ストークス、マーティンなど、私の意見に従って仕事の性質を一変させた男性がたくさんいます。19) ウンディーネ〔伝説上の水の精〕のように魂というものをもっていなかった人が、それをもつにいたったすばらしい例もあるのです。</p>	<p>12) 彼は、最も退屈でテクニカルな、またきわめてむずかしい管理行政という科学を人間の具体的な生活との関連において学びました。13) 私と違って心おどる経験からではなく、ロンドンのこの私のソファのかたわらで、無味乾燥な規定を書き綴ることによって。14) これこそが真の共感というものではないでしょうか。15) もう一人、私が医務局長にしたアレグザンダーという人もほとんど同じような行動を取りました。16) すでに故人となっている、天性の詩人クラブも、私のために看護行政にたずさわってくれたのです。17) この3人はみな、私に対する共感のゆえに、自分の人生を完全に変えてしまったのでした。18) そのほかにも、ファー、マクニール、タロック、ストークス、マーティンなど、私の意見に従って仕事の性質を一変させた男性がたくさんいます。19) ウンディーネ〔伝説上の水の精〕のように魂というものをもっていなかった人が、それをもつにいたったすばらしい例もあるのです。</p>
<p>これに対して、20) 女性の共感の寄せ方はどうでしょうか。21) 私の経験の範囲内でお話ししてみましょう。22) 女性についての私の経験はほとんどヨーロッパ全体に比されるほど膨大なものですし、また直接的です。23) 私は、あるときはイギリスの伯爵夫人と、またあるときはプロシアの農婦と、身近な関わりをもちました。24) ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、私が経験してきたほどさまざまな信条の女性を監督したことはないでしょう。そして、25) 私ほど、女性の間に「情熱」を掻き立てた者もないと思います。でも、26) 私は、私の主張に共感する一派を率いているわけではありません。27) 私の考えは、女性のうちにしっかり根を張っていないのです。たとえば、28) クリミア戦争にしても、あの戦いや現地の病院から少しでも教訓を身につけて帰った女性が、一人でもいたでしょうか？……………29) 私は、私の経験から学んだ女性にこれまで一度も会っ</p>	<p>20) 女性の共感の寄せ方はどうでしょうか。21) 私の経験の範囲内でお話ししてみましょう。22) 女性についての私の経験はほとんどヨーロッパ全体に比されるほど膨大なものですし、また直接的です。23) 私は、あるときはイギリスの伯爵夫人と、またあるときはプロシアの農婦と、身近な関わりをもちました。24) ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、私が経験してきたほどさまざまな信条の女性を監督したことはないでしょう。25) 私ほど、女性の間に「情熱」を掻き立てた者もないと思います。26) 私は、私の主張に共感する一派を率いているわけではありません。27) 私の考えは、女性のうちにしっかり根を張っていないのです。</p>

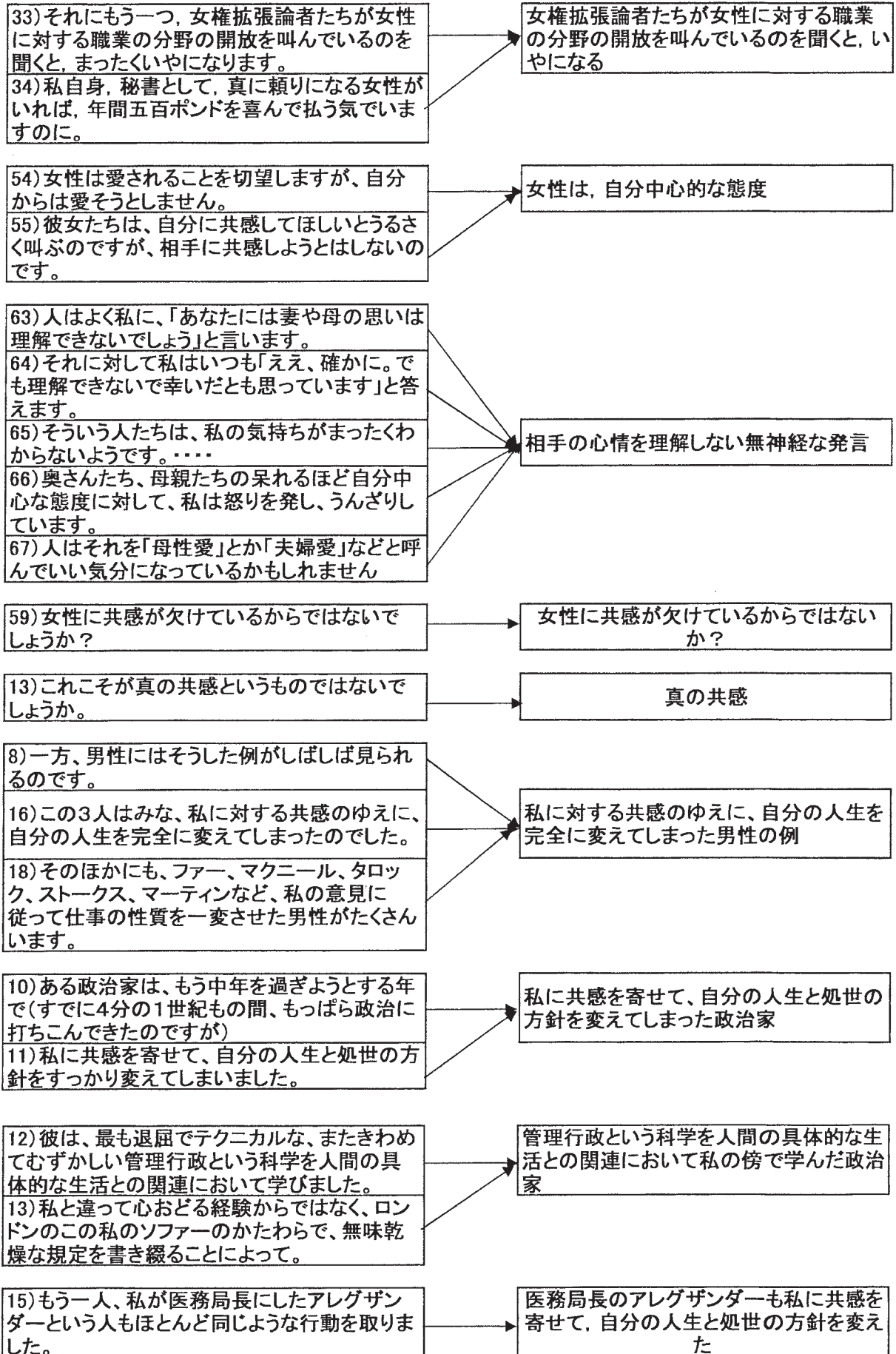
本 文	重要文脈
<p>たことがありません。これは30) 共感が欠けているからです。31) 何かの口実として、「記憶にない」と言い立てる人々に、私は苛立ちを感じます。32) 耳を傾けもしないことが、どうして記憶できるでしょう? . . . . .</p> <p>33) それにもう一つ、女権拡張論者たちが女性に対する職業の分野の開放を叫んでいるのを聞くと、まったくいやになります。34) 私自身、秘書として、真に頼りになる女性がいれば、年間五百ポンドを喜んで払う気です。35) 私が知っている二人の総婦長も同じようなことを言っていました。 . . . . . 36) 女性は、閣僚の名前や総司令部の所在も知りません。37) 誰が亡くなって誰が生きているかなどについても、まったく関心をもっていない。38) どの教会に主教がいるかさえ知りません。39) 確かに私自身も、以前はそういうことに疎かったのです。40) クリミアに行ったときには、私は大佐と伍長の違いさえわからなかったのですから。41) そういうときには、陸軍の名簿と年間に役に立つのですが、42) 私の仕事を手伝えるためにそれらを調べてみようという意欲のある女性はいませんでした。43) これまで私に関心をもってくれ、私から影響を受けた女性は、先に述べた総婦長たちだけです。44) でも彼女たちは私と同様、自分の仕事に忙殺されています。 . . . . . 45) ある意味では、パースの言うとおりに、私は「男性的」なのかもしれません。46) なぜかという、私は人に共感できるからです。47) それ以外に私には、才能もないし、何の取り柄もないのです。48) パースやヒラリーやマリアンヌやレディー・ダンセイニは、みな私より才能をもっています。49) ある人たちは、私より奉仕の心に燃えています。けれども、50) 他人への共感をわずかでももっている人はいないのです。それにひきかえ、51) ミセス・ハーバートは、純粋な共感から夫君の秘書役になっていました。52) 彼女には彼の政治方針は理解できなかったと思いますが、それでも主君のためにまったく、「男のような語調」の手紙が書けたのです。53) おそらくマダム・レカミエも、そのような共感の持ち主であったと私には思われます。 . . . . . 54) 女性は愛されることを切望しますが、自分からは愛そうとしません。55) 彼女たちは、自分に共感してほしいとうるさく叫ぶのですが、相手に共感しようとはしないのです。56) 相手に関することを長く心に留めておくことができないからです。 . . . . . 57) 女性は相手に物事を正確に伝えることができず、58) 相手の女性もまた、それを正確に受け取って必要な情報として心に留めることがありません。それもこれもすべて、59) 女性に共感が欠けているからではないでしょうか?</p>	<p>28) クリミア戦争にしても、あの戦いや現地の病院から少しでも教訓を身につけて帰った女性が、一人でもいたでしょうか? . . . . .</p> <p>29) 私は、私の経験から学んだ女性にこれまで一度も会ったことがありません。</p> <p>30) 共感が欠けているからです。</p> <p>31) 何かの口実として、「記憶にない」と言い立てる人々に、私は苛立ちを感じます。</p> <p>32) 耳を傾けもしないことが、どうして記憶できるでしょう? . . . . .</p> <p>33) それにもう一つ、女権拡張論者たちが女性に対する職業の分野の開放を叫んでいるのを聞くと、まったくいやになります。</p> <p>34) 私自身、秘書として、真に頼りになる女性がいれば、年間五百ポンドを喜んで払う気です。35) 私が知っている二人の総婦長も同じようなことを言っていました。 . . . . .</p> <p>36) 女性は、閣僚の名前や総司令部の所在も知りません。</p> <p>37) 誰が亡くなって誰が生きているかなどについても、まったく関心をもっていない。</p> <p>38) どの教会に主教がいるかさえ知りません。</p> <p>39) 確かに私自身も、以前はそういうことに疎かったのです。40) クリミアに行ったときには、私は大佐と伍長の違いさえわからなかったのですから。</p> <p>41) そういうときには、陸軍の名簿と年間に役に立つのですが、42) 私の仕事を手伝えるためにそれらを調べてみようという意欲のある女性はいませんでした。</p> <p>43) これまで私に関心をもってくれ、私から影響を受けた女性は、先に述べた総婦長たちだけです。</p> <p>44) でも彼女たちは私と同様、自分の仕事に忙殺されています。 . . . . .</p> <p>45) ある意味では、パースの言うとおりに、私は「男性的」なのかもしれません。</p> <p>46) なぜかという、私は人に共感できるからです。</p> <p>47) それ以外に私には、才能もないし、何の取り柄もないのです。</p> <p>48) パースやヒラリーやマリアンヌやレディー・ダンセイニは、みな私より才能をもっていますし。</p> <p>49) ある人たちは、私より奉仕の心に燃えています。</p> <p>50) 他人への共感をわずかでももっている人はいないのです。</p> <p>51) ミセス・ハーバートは、純粋な共感から夫君の秘書役になっていました。</p> <p>52) 彼女には彼の政治方針は理解できなかったと思いますが、それでも主君のためにまったく、「男のような語調」の手紙が書けたのです。</p> <p>53) おそらくマダム・レカミエも、そのような共感の持ち主であったと私には思われます。 . . . . .</p> <p>54) 女性は愛されることを切望しますが、自分からは愛そうとしません。</p> <p>55) 彼女たちは、自分に共感してほしいとうるさく叫ぶのですが、相手に共感しようとはしないのです。</p> <p>56) 相手に関することを長く心に留めておくことができ</p>
<p>60) あなたは、マダム・レカミエの生活は「輝かしくはあったが、むなしかった」と述べておられますね。それは61) 彼女が子宝に恵まれなかったからだとも。62) けれどもどうか、そうした慣習的な考え方に捉われないようにおねがいします。63) 人はよく私に、「あなたには妻や母の思いは理解できないでしょう」と言います。64) それに対して私はいつも「ええ、確かに。でも理解できないで幸いだとも思っています」と答えます。65) そういった人たちは、私の気持ちがまったくわからないよ</p>	

本 文	重要文脈
<p>うです。・・・66) 奥さんたち、母親たちの呆れるほど自分中心な態度に対して、私は怒りを発し、うんざりしています。67) 人はそれを「母性愛」とか「夫婦愛」などと呼んでいい気分になっているかもしれませんが、68) 自分自身の経験から真実を語ってもらいたいものです。69) エゼキエルは神の御言葉の「しるし」を求めて、裸になって走り回ったと聖書に記されています。70) 私自身はこの国の習慣を無視して裸で走り回ることにはできませんが、71) 自分の気持ちの「しるし」として、三つの寡婦帽を頭にのせているのです。72) 一つはシドニー・ハーバートのためのもの、73) もう一つはアーサー・クラフのためのもの、そして74) 最後のとりわけ大きな寡婦帽は、これまで私の最も近くにあり、最も親しかった人の共感を失ったことに対してです。</p> <p>75) マダム・レカミエは、マダム・サルヴァージュやシャトーブリアンなど、正反対の人々に「助言を与え、共感を寄せる」ことがどうしてできたのでしょうか？ 76) 私には理解できません。それに、77) はっきりした方針を打ち出すことなしに他人をどうして「支持」できるのか、解しかねます。78) それではまるで私がシドニー・ハーバートに、「あなたは政治家であるべきです」というだけで、すぐれた政治家たるべき具体的な方針を示さないようなものではありませんか。79) 私でしたら、たとえハーバードとグラッドストーンという、まったく方針を異にする二人の政治家に同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできないでしょう。それに、80) ただ雑多なことについて一般的な会話をかわすだけでは、友人の助言者にさえなれないと思います。81) ハーバードと私が協力したときには、まずよく話し合っ、どう対処するかを検討することにしていました。</p> <p>82) では、この辺で失礼します。・・・二つほど相談を受けていますが、あまりに真剣に「心を悩ますと、脊髄に鬱血を起こして中風になると言われておりますので、用心しています。</p>	<p>ないからです。・・・</p> <p>57) 女性は相手に物事を正確に伝えることができませんし、58) 相手の女性もまた、それを正確に受け取って必要な情報として心に留めることがありません。</p> <p>59) 女性に共感が欠けているからではないでしょうか？</p> <p>60) あなたは、マダム・レカミエの生活は「輝かしくはあったが、むなしかった」と述べておられますね。</p> <p>61) 彼女が子宝に恵まれなかったからだとも。62) けれどもどうか、そうした慣習的な考え方に捉われないようにおねがいします。</p> <p>63) 人はよく私に、「あなたには妻や母の思いは理解できないでしょう」と言います。</p> <p>64) それに対して私はいつも「ええ、確かに。でも理解できないで幸いだとも思っています」と答えます。</p> <p>65) そういう人たちは、私の気持ちがまったくわからないようです。・・・</p> <p>66) 奥さんたち、母親たちの呆れるほど自分中心な態度に対して、私は怒りを発し、うんざりしています。</p> <p>67) 人はそれを「母性愛」とか「夫婦愛」などと呼んでいい気分になっているかもしれませんが、</p> <p>68) 自分自身の経験から真実を語ってもらいたいものです。69) エゼキエルは神の御言葉の「しるし」を求めて、裸になって走り回ったと聖書に記されています。</p> <p>70) 私自身はこの国の習慣を無視して裸で走り回ることにはできませんが、</p> <p>71) 自分の気持ちの「しるし」として、三つの寡婦帽を頭にのせているのです。</p> <p>72) 一つはシドニー・ハーバートのためのもの、</p> <p>73) もう一つはアーサー・クラフのためのもの、そして74) 最後のとりわけ大きな寡婦帽は、これまで私の最も近くにあり、最も親しかった人の共感を失ったことに対してです。</p> <p>75) マダム・レカミエは、マダム・サルヴァージュやシャトーブリアンなど、正反対の人々に「助言を与え、共感を寄せる」ことがどうしてできたのでしょうか？</p> <p>76) 私には理解できません。</p> <p>77) はっきりした方針を打ち出すことなしに他人をどうして「支持」できるのか、解しかねます。</p> <p>78) それではまるで私がシドニー・ハーバートに、「あなたは政治家であるべきです」というだけで、すぐれた政治家たるべき具体的な方針を示さないようなものではありませんか。</p> <p>79) 私でしたら、たとえハーバードとグラッドストーンという、まったく方針を異にする二人の政治家に同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできないでしょう。</p> <p>80) ただ雑多なことについて一般的な会話をかわすだけでは、友人の助言者にさえなれないと思います。</p> <p>81) ハーバードと私が協力したときには、まずよく話し合っ、どう対処するかを検討することにしていました。</p> <p>82) では、この辺で失礼します。・・・二つほど相談を受けていますが、あまりに真剣に「心を悩ますと、脊髄に鬱血を起こして中風になると言われておりますので、用心しています。</p>

表-2 重要文脈からのサブカテゴリー化

重要文脈	サブカテゴリー
1) あなたの御本『マダム・レカミエ』を半分ほど拝読いたしましたが、とても面白くて夢中になっております。	『マダム・レカミエ』が、とても面白く夢中になっている
2) いくつかの点で私はあなたと見解を異にしています。	いくつかの点であなたと見解を異にしている
4) あなたの御本の登場人物についてではなく、あなたの結論、つまり「女性は男性に比べて、他人に対して共感をいだく傾向が強い」ということについてです。	あなたの結論、「女性は男性に比べて、他人に対して共感をいだく傾向が強い」ということ
60) あなたは、マダム・レカミエの生活は「輝かしくはあったが、むなしかった」と述べておられますね。 61) 彼女が子宝に恵まれなかったからだとも。	マダム・レカミエの生活は子宝に恵まれなかったからむなしかった
6) あなたのお考えは慣習的に受けいれられているもの 63) けれどもどうか、そうした慣習的な考え方に掬われないようにおねがいします。	あなたの考えは慣習的
68) 自分自身の経験から真実を語ってほしいものです。	自分自身の経験から真実を語ってほしい
5) もしいま、私が自分の経験にもとづいて本を書くとしたら、最初の書き出しは「女性の場合、他人に対して共感をいだくことがめったにない」とするでしょう。	私(フローレンス)が経験にもとづく本の書き出しは「女性の場合、他人に対して共感をいだくことがめったにない」とする
7) 私の考えは、自分の経験からの確信です。 22) 女性についての私の経験はほとんどヨーロッパ全体に比されるほど膨大なものですし、また直接的です。	ヨーロッパ全体に比されるほど膨大で、階級を問わない直接的な女性についての私の経験からの確信である
3) というよりは、納得できない点が多々あるのです。 20) 女性の共感の寄せ方はどうでしょうか。	女性の共感の寄せ方について納得できない点が多い
21) 私の経験の範囲内でお話してみましよう。 23) 私は、あるときはイギリスの伯爵夫人と、またあるときはプロシアの農婦と、身近な関わりをもちました。	イギリスの伯爵夫人やプロシアの農婦との身近な関わりを持った
24) ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、私が経験してきたほどさまざまな信条の女性を監督したことはないでしょう。	ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、私が経験してきたほどさまざまな信条の女性を監督したことはないでしょう。
25) 私ほど、女性の中に「情熱」を掻き立てた者もないと思います。 26) 私は、私の主張に共感する一派を率いているわけではありません。	私は、私の主張に共感する一派を率いているわけではないが、私ほど、女性の中に「情熱」を掻き立てた者もない
30) 共感が欠けているからです。	女性には共感が欠けている

<p>8) 私は今まで女性が私のせいで、あるいは私の意見のせいで、ほんの少しでも自分の生き方を変えたという実例を見たことがありません。</p>	<p>私から学ぼうとして、自分の生き方を変えた女性は見たことがない</p>
<p>28) 私は、私の経験から学んだ女性にこれまで一度も会ったことがありません。</p>	<p>私の経験から学んだ女性に会ったことがない</p>
<p>26) 私の考えは、女性のうちにしっかり根を張っていないのです。</p>	<p>私の経験から学んだ女性に会ったことがない</p>
<p>27) クリミア戦争にしても、あの戦いや現地の病院から少しでも教訓を身につけて帰った女性が、一人でもいたでしょうか？……</p>	<p>私の経験から学んだ女性に会ったことがない</p>
<p>31) 何かの口実として、「記憶にない」と言い立てる人々に、私は苛立ちを感じます。</p>	<p>女性たちは相手に関心を持たず、傾聴しない、記憶しようとしな</p>
<p>32) 耳を傾けもしないことが、どうして記憶できるでしょう？……</p>	<p>女性たちは相手に関心を持たず、傾聴しない、記憶しようとしな</p>
<p>56) 相手に関する事を長く心に留めておくことができないからです。……</p>	<p>女性たちは相手に関心を持たず、傾聴しない、記憶しようとしな</p>
<p>58) 相手の女性もまた、それを正確に受け取って必要な情報として心に留めることがありません。</p>	<p>相手の女性も、それを正確に受け取って必要な情報として心に留めることがない</p>
<p>57) 女性は相手に物事を正確に伝えることができません</p>	<p>女性は相手に物事を正確に伝えることができない</p>
<p>36) 女性は、閣僚の名前や総司令部の所在も知りません。</p>	<p>過去において自分自身もそうであったが女性は総じて無知、無関心である。</p>
<p>37) 誰が亡くなって誰が生きているかなどについても、まったく関心をもっていません。</p>	<p>過去において自分自身もそうであったが女性は総じて無知、無関心である。</p>
<p>38) どの教会に主教がいるかさえ知りません。</p>	<p>過去において自分自身もそうであったが女性は総じて無知、無関心である。</p>
<p>39) 確かに私自身も、以前はそういうことに疎かったのです。</p>	<p>過去において自分自身もそうであったが女性は総じて無知、無関心である。</p>
<p>41) 私の仕事を手伝うためにそれらを調べてみようという意欲のある女性はいませんでした。</p>	<p>私の仕事を手伝うために知識欲のある女性はいなかった</p>
<p>40) クリミアに行ったときには、私は大佐と伍長の違いさえわからなかったのですから。</p>	<p>大佐と伍長の違いがわからなかったら、陸軍の名簿と年鑑が役に立つ</p>
<p>41) そういうときには、陸軍の名簿と年鑑が役に立つのです</p>	<p>大佐と伍長の違いがわからなかったら、陸軍の名簿と年鑑が役に立つ</p>
<p>19) ウンディーネ[伝説上の水の精]のように魂というものをもっていなかった人が、それをもつにいたったすばらしい例もあるのです。</p>	<p>ウンディーネ[伝説上の水の精]のように魂というものをもっていなかった人が、もつにいたったすばらしい例もある</p>
<p>35) 私が知っている二人の総婦長も同じようなことを言っていました。……</p>	<p>私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長だけ</p>
<p>43) これまで私に関心をもってくれ、私から影響を受けた女性は、先に述べた総婦長たちだけです。</p>	<p>私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長だけ</p>
<p>44) でも彼女たちは私と同様、自分の仕事に忙殺されています。……</p>	<p>私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長だけ</p>
<p>51) ミセス・ハーバートは、純粋な共感から夫君の秘書役になっていました。</p>	<p>ミセス・ハーバートやマダム・レカミエは、夫への純粋な共感があった</p>
<p>52) 彼女には彼の政治方針は理解できなかったと思いますが、それでも主君のためにまったく、「男のような語調」の手紙が書けたのです。</p>	<p>ミセス・ハーバートやマダム・レカミエは、夫への純粋な共感があった</p>
<p>53) おそらくマダム・レカミエも、そのような共感の持ち主であったと私には思われます。……</p>	<p>ミセス・ハーバートやマダム・レカミエは、夫への純粋な共感があった</p>





<p>16)すでに故人となっている、天性の詩人クラブも、私のために看護行政にたずさわってくれたのです。</p>	<p>天性の詩人クラブも、私のために看護行政にたずさわった</p>
<p>69)エゼキエルは神の御言葉の「しるし」を求めて、裸になって走り回ったと聖書に記されています。</p>	<p>エゼキエルは神の御言葉の「しるし」を求めて、裸になって走り回ったと聖書に記されている</p>
<p>70)私自身はこの国の習慣を無視して裸で走り回ることはできません</p>	<p>私自身はこの国の習慣を無視して裸で走り回ることはできない</p>
<p>71)自分の気持ちの「しるし」として、三つの寡婦帽を頭にのせているのです。 72)一つはシドニー・ハーバートのためのもの、 73)もう一つはアーサー・クラブのためのもの、 74)最後のとりわけ大きな寡婦帽は、これまで私の最も近くにあり、最も親しかった人の共感を失ったことに対してです。</p>	<p>自分の気持ちの「しるし」として、三つの寡婦帽を頭にのせている</p>
<p>45)ある意味では、パースの言うとおり、私は「男性的」なのかもしれません。 46)なぜかという、私は人に共感できるからです。</p>	<p>私は人に共感できるから、ある意味「男性的」なのかもしれない</p>
<p>47)それ以外に私には、才能もないし、何の取り柄もないのです。</p>	<p>共感できること以外に私には、才能もないし、何の取り柄もない</p>
<p>48)パースやヒラリーやマリアンヌやレディー・ダンセイニは、みな私より才能をもっていますし。 49)ある人たちは、私より奉仕の心に燃えています。 50)他人への共感をわずかでも持っている人はいないのです。</p>	<p>ある人たちは私より才能を持ち、奉仕の心を持つが、共感を持っていない</p>
<p>75)マダム・レカミエは、マダム・サルヴァージュやシャトブリアンなど、正反対の人々に「助言を与え、共感を寄せる」ことがどうしてできたのでしょうか？ 76)私には理解できません。 77)はっきりした方針を打ち出すことなしに他人をどうして「支持」できるのか、解しかねます。</p>	<p>マダム・レカミエは、正反対の人々に「助言を与え、共感を寄せる」ことがどうしてできたのか理解できない</p>
<p>78)それではまるで私がシドニー・ハーバートに、「あなたは政治家であるべきです」というだけで、すぐれた政治家たるべき具体的な方針を示さないようなものではありませんか。 79)私でしたら、たとえハーバードとグラッドストーンという、まったく方針を異にする二人の政治家と同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできないでしょう。</p>	<p>私は方針を異にする二人の政治家に、同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできない</p>
<p>81)ただ雑多なことについて一般的な会話をかわすだけでは、友人の助言者にさえなれないと思います。 82)ハーバードと私が協力したときには、まずよく話し合っ、どう対処するかを検討することにしていました。</p>	<p>一般的な会話を交わすだけでは、友人の助言者にさえなれない</p>

表-3 サブカテゴリー化からのカテゴリー化

サブカテゴリー	カテゴリー化
『マダム・レカミエ』が、とても面白く夢中になっている いくつかの点であなたと見解を異にしている	『マダム・レカミエ』に、夢中になっているが、いくつかの点であなたと見解を異にしている
あなたの結論、「女性は男性に比べて、他人に対して共感をいづく傾向が強い」ということ マダム・レカミエの生活は子宝に恵まれなかったからむなしかった あなたの考えは慣習的 自分自身の経験から真実を語ってほしい	女性は男性に比べて、他人に対して共感をいづく傾向が強いという貴方の結論あるいは、マダム・レカミエの生活は子宝に恵まれなかったからむなしかったは慣習的であるから、自身の経験から真実を語ってほしい
私(フローレンス)が経験にもとづく本の書き出しは「女性の場合、他人に対して共感をいづくことがめったにない」とする 女性の共感の寄せ方について納得できない点が多い	自己の経験から述べるとすれば、女性には共感が欠けている
ヨーロッパ全体に比されるほど膨大で、階級を問わない直接的な女性についての私の経験からの確信である イギリスの伯爵夫人やプロシアの農婦との身近な関わりを持った	イギリスの伯爵夫人やプロシアの農婦との身近な関わりなど、ヨーロッパ全体に比されるほど膨大で、階級を問わない直接的な女性についての私の経験からの確信である
ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、私が経験してきたほどさまざまな信条の女性を監督したことはないでしょう。 私は、私の主張に共感する一派を率いているわけではないが、私ほど、女性の中に「情熱」を掻き立てた者もない	ローマ・カトリックの尼僧院長ですら、経験したことのないさまざまな信条の女性を監督し、私ほど、女性の中に「情熱」を掻き立てた者もない
女性には共感が欠けている 私から学ぼうとして、自分の生き方を変えた女性を見たことがない 私の経験から学んだ女性に会ったことがない 女性たちは相手に関心を持たず、傾聴しない、記憶しようとしていない 相手の女性も、それを正確に受け取って必要な情報として心に留めることがない 女性は相手に物事を正確に伝えることができない	女性にはコミュニケーション能力がなく共感が欠けているゆえに、私をモデルにして生き方を変えた女性はいない
過去において自分自身もそうであったが女性は総じて無知、無関心である。 私の仕事を手伝うために知識欲のある女性はいなかった 大佐と伍長の違いがわからなかったら、陸軍の名簿と年鑑が役に立つ	女性は総じて無知、無関心であり、知識欲も向上心もない。

ウンディーネ[伝説上の水の精]のように魂というものをもっていなかった人が、もつにいたったすばらしい例もある 私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長だけ ミセス・ハーバートやマダム・レカミエは、夫への純粋な共感があった	ウンディーネ[伝説上の水の精]のようなすばらしい例もあるし、私に関心を持ち影響を受けたのは二人の総婦長、夫への純粋な共感があった女性たちも存在はするが。
--	--

女権拡張論者たちが女性に対する職業の分野の開放を叫んでいるのを聞くと、いやにな 女性は、自分中心的な態度 相手の心情を理解しない無神経な発言 女性に共感が欠けているからではないか？	女権拡張論者たちが相手の心情を理解しない無神経な発言、自分中心的な態度は共感が欠けているからではないか
---	---

真の共感 私に対する共感のゆえに、自分の人生を完全に変わってしまった男性の例 私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針を変えてしまった政治家 管理行政という科学を人間の具体的な生活との関連において私の傍で学んだ政治家 医務局長のアレグザンダーも私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針を変えた 天性の詩人クラブも、私のために看護行政にたずさわった	自分の人生を完全に変わってしまった男性達が真の共感である
--	------------------------------

エゼキエルは神の御言葉の「しるし」を求めて、裸になって走り回ったと聖書に記されている 私自身はこの国の習慣を無視して裸で走り回ることにはできない 自分の気持ちの「しるし」として、三つの寡婦帽を頭にのせている	ナイチンゲールの親しかった人への真実(共感)のあかし
---	----------------------------

私は人に共感できるから、ある意味「男性的」なのかもしれない 共感できること以外に私には、才能もないし、何の取り柄もない ある人たちは私より才能を持ち、奉仕の心を持つが、共感を持っていない	私は人に共感できるから、ある意味「男性的」なのかもしれない
---	-------------------------------

マダム・レカミエは、正反対の人々に「助言を与え、共感を寄せる」ことがどうしてできたのか理解できない 私は方針を異にする二人の政治家に、同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできない 一般的な会話を交わすだけでは、友人の助言者にさえなれない	私はマダム・レカミエのように方針を異にする二人の政治家に、同時に「助言を与え、共感を寄せる」ことはとてもできない
---	--

## 資料-1 ナイチンゲールからモール夫人への手紙全文

To Mary Clarke Mohl

32 South St 13 Dec 1861

My dear Mme. Mohl,

I have read your book thro' last night and am immensely charmed by it. But some things I disagree with and many I do not understand. This does not apply to the characters. I understand the character of Mme. Recamier, Mme. de Stael, Mme de Maintenon &c, &c as I never did before. But to your conclusions. E.g. you say, 'women are more sympathetic than men', Now if I were to write a book out of my experience, I should begin, women have no sympathy .

Yours is the tradition. Mine is the conviction of experience. I have never found one woman who has altered her life one iota for me or my opinions. Now look at my experience of men. A statesman, past middle age, absorbed in politics for a quarter of a century, out of 'sympathy' with me, remodels his whole life and policy – I earn a science, the driest, the most technical, the most difficult, that of administration as far as it concerns the lives of men, not, as I learned earned it, in the field, from the stirring experience, but by writing dry Regulations in a London room by my sofa with me.

This is what I call real sympathy. Another (Alexander, whom I made Director-Gen'l), does very nearly the same thing. He is dead too. Clough, a poet born if ever there was one – takes to Nursing – administration in the same way, for me. I only mention three, whose whole lives were remodeled by sympathy for me. But I could mention very many others, Farr, McNeill, Tulloch, Storcks, Martin, who in a lesser degree have altered their work by my opinions. And most wonderful of all, a man born without a soul, like Undine – Sutherland. All these elderly men.

Now just look at the degree in which women have sympathy – as far as my experience is concerned. And my experience of women is almost as large as Europe. And it is so intimate too. I have lived and slept in the same bed with English Countesses and Prussian Bauerinnen with a closeness of intimacy no one ever had before. No Roman Catholic Superieure has ever had the charge of women of the different creeds that I have had. No woman has excited 'passions' among women more than I have.

Yet I leave no school behind me. My doctrines have taken no hold among women. Not one of my Crimean following learnt anything from me – or gave herself for one moment after she came home to carry out the lesson of that war or of those hospitals.

No woman that I know has ever appris a apprende. 1 And I attribute this to want of sympathy. You say somewhere that women have no attention. Yes. And I attribute this to want of sympathy.

Nothing makes me so impatient as people complaining of their want of memory. How can you remember what you have never heard ?

They don't know the names of the Cabinet Ministers. They don't know the Offices at the Horse Guards. They don't know who of the men of the day is dead, and who is alive. They don't know which of the Churches has Bishops and which not. Now I'm sure I did not know these things. When I went to the Crimea, I did not know a Colonel from a Corporal. But there are such things as Army Lists and Almanacs. Yet I never could find a woman who, out of sympathy, would consult one – for my work.

Nay, since Sidney Herbert's death, I have not seen a newspaper. Because I could not bear to see his name. Yet somehow or other I know things. And they do not.

The only woman I ever influenced by sympathy was one of those Lady Superinten'ts, I have named. Yet she is like me overwhelmed with her own business.

A woman once told me that my character would be more sympathized with by men than by women. In one sense, I don't choose to have that said. Sidney Herbert and I were together exactly like two men – exactly like him and Gladstone.

And as for Clough~ Oh Jonathan, my brother Jonathan my love to thee was very great, passing the love o women. In another sense, I do believe it is true. I do believe I am 'like a man', as 2 says. But how? In having sympathy. I am sure I have nothing else. I am sure I have no genius. I am sure that my contemporaries, Parthe, Hilary, Marianne, Lady Dunsany were all cleverer than I was – and several of them more unselfish. But not one had a bit of sympathy.

Now Sidney Herbert's wife just did the Secretary's work for her husband (which I have had to do without) out of pure sympathy. – – – She did not understand his policy. – – – Yet she could write his letters for him 'like a man'. I should think Mme. R6camier was another specimen of pure sympathy.

What follows perhaps I may draw too much from observations in my own family, viz:

Women crave for being loved, not for loving. They scream at you for sympathy all day long, they are incapable of

giving any in return, for they cannot even remember your affairs long enough to do so, they care much less for knowing a truth than for disguising that truth from others, if it is a painful one. Hence they never do 'learn to learn' what is truth.

When you tell them anything, they reply, 'Oh I thought otherwise – so and so I thought' and they will go on to tell you why they thought so, and are incapable of listening to your fact in return, altho' they themselves may have applied to you for the information.

They cannot state a fact accurately to another – nor can that other attend to it accurately enough for it to become information. Now is not all this the result of want of sympathy?

(2) You say of Mme R6camier that her existence was 'empty but brilliant'. And you attribute it to want of family. Oh dear friend, don't give in to that sort of tradition. People often say to me, you don't know what a wife and mother feels. No, I say, I don't. And I am very glad I don't. And they don't know what I feel. I am sick with indignation at what wives and mothers will do, the most egregious selfishness. And people call it all maternal or conjugal affection and think it pretty to say so.

No, no, let each person tell the truth from his own experience. Ezekiel went running about naked, 'for a sign'. I can't run about naked, because it is not the custom of the country. But I would mount three widows' caps on my head, 'for a sign'. And I would cry, this is for Sidney Herbert, I am his real widow – this for Arthur Clough, I am his true widow (And I don't find it a bit of comfort that I had two legs to cut off whereas other people have but one). And this, the biggest widow's cap of all, is for the loss of all sympathy on the part of my dearest and nearest. (For that my Aunt was. We were like two lovers.)

(DO you know Clough was so like M. Mohl, only on a smaller intellectual and moral scale – or rather I would say on a smaller scale altogether.) I heard a Greek say to Mr. Wyse at Salamis in 1850, God Almighty is surely an Englishman. Now I don't think he is. He has taken the only man among Ministers. What would it have signified if all the others had been taken ?

He has taken the only man in one family. Oh how well we could have spared the whole family! He has taken (and all in five short months) the only man at the Palace. What would it have signified if the whole lot had gone, excepting only Albert?

I could tell you a great deal about that. He neither liked nor was liked. But what he has done for our country no one knows.

The Queen has really behaved like a hero. Has buckled to business at once. After all, it is a great thing to be a Queen. She is the only woman in these realms, except perhaps myself, who has a must in her life – who must set aside private griefs and attend to the res publica. On Sunday ministers were appalled. They thought it was going to be a case of Joanna of Spain. Now everybody is reassured. Albert was really a Minister this very few knew. Sir Robert Peel taught him.

We are shipping off the Expedition to Canada<sup>4</sup> as fast as we can, I have been working just as I did in the times of Sidney Herbert. Alas ! he left no organization, my dear master. But the Horse Guards were so terrified at the idea of the national indignation, if they lost another Army, that they have consented to everything. But I have wandered from your book.

(3) I cannot understand how Mme. R6camier could give 'advice and sympathy' to such opposite people e. g. Mme. Salvage and Chateaubriand. Neither can I understand, how she could give 'support' without recommending a distinct line of policy – by merely keeping up the tone to a high one.

It is as if I had said to S. Herbert, Be a statesman, be a statesman – instead of indicating to him a definite course of statesmanship to follow. Also I am sure I never could have given 'advice and sympathy' to Gladstone and S. Herbert – men pursuing opposite lines of policy.

Also I am sure I never could have been the friend and adviser of Sidney Herbert, of Alexander, and of others – by simply keeping up the tone of general conversation on promiscuous matters.

We debated and settled measures together. That is the way we did it.

Adieu dear friend. How glad am I to see this miserable year come to a close. This is the shortest day. Would it were the last.

Ever yours,

F. N.